新天地全

特56
814

022568-000-8

特56-814

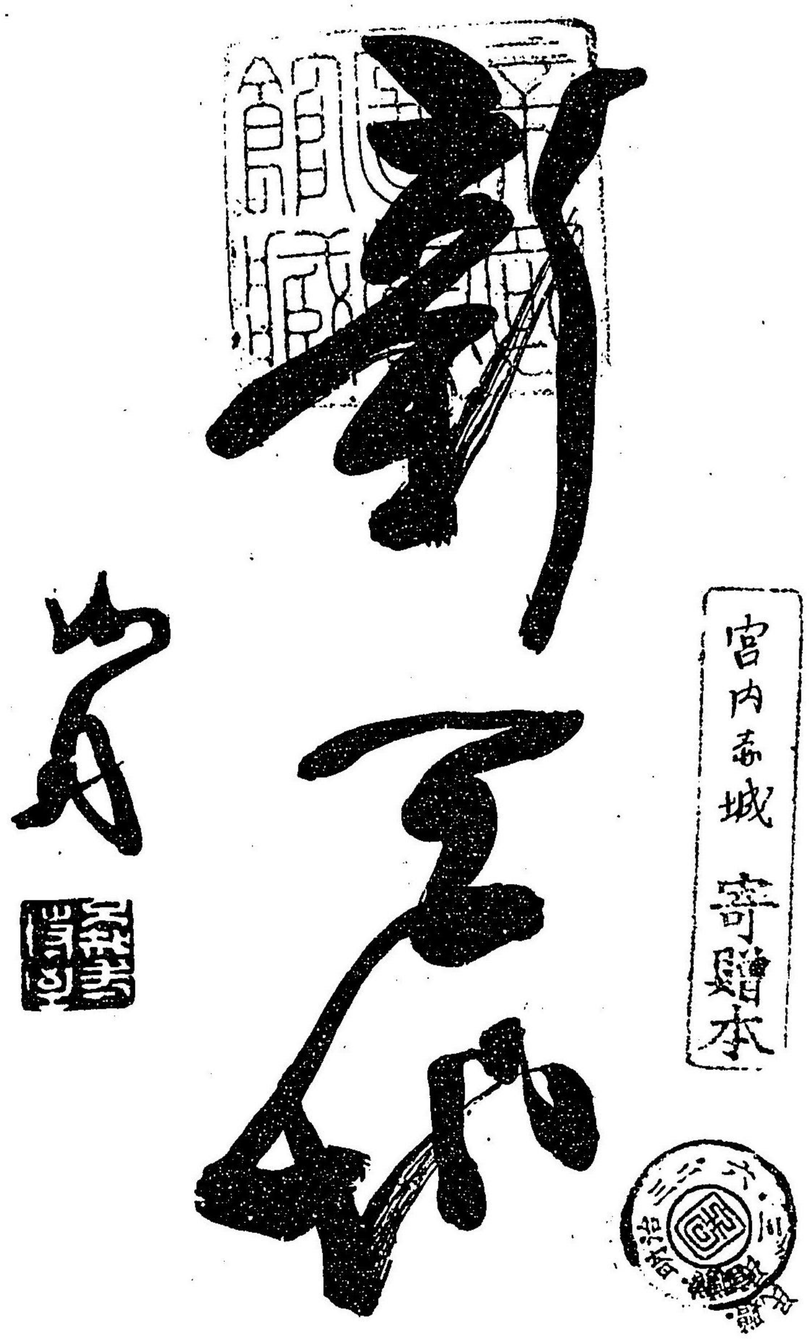
新天地

宮内　赤城（猪三郎）／著

M32

ADB-0266

特56
814



宮内庁城 寄贈本

玉老人世淚亦眼
不春氣神通一飛
招搖搖爬出生
[illegible]
[illegible]

赤城富田君書我之地之著
錄由心代跋詩得為

九萬鵬程未足誇水益舟又
火輪車天涯咫尺隣仙
笑殺尚辛陳徒槎 舊老
赤性室西君一家
湖山六十五老叟

辱知諸大家

原心猛　三神快運　曾我祐準　伊達宗德
勝間田稔　內海忠勝　谷干城　山縣有朋
高橋泥舟　國分松與　榎本梁川　伊達宗基
安樂兼道　佐藤進　石井北谷　松平康莊
木下廣次　濱野昇　安部井磐根　德川昭武
大沼渉　佐藤舜海　西櫻岳　池田仲博
大築尙志　並木栗水　前島和橋　黑田長成
竹添井々　青山鐵槍　柴野義廣　陸奧宗光
高木勤　江木千之　野口珂北　水谷川忠起
足立正聲　藤澤南岳　秋月天放　池田慶政
宮內君浦　古莊一雄　須永武義　野津道貫
岩崎明岳　山田新川　野間駟　黑川通軌
成島柳北　吉川松浦　一戶兵衛　德川厚
栗本鋤雲　松岡友鹿　藤井包總　勝精

右諸大人余曾辱知遇者錄以爲備忘。他諸大家則別記之。恨紙幅有限也。　著者再拜

新天地目次

總說　國都　農工商及び物産　內閣
神社佛閣　博物館及び共進會
學校　河川道路　神職僧侶及び教員
衣服頭髮　病院及び貧院　書籍新聞及び畫圖
諸禮　山林原野　茶酒砂糖煙草
金銀珠玉綺羅錦繡　醫士辯護士　儒佛二教
陸海軍　官吏議員　華士族平民
郵便電信鐵道　牧畜漁獵　俳優講談師諸藝人
賞罰　婢僕　外國人及び海外居留者
渡行及び旅行
附錄　文詩　三十餘篇　以上

新天地

日東宮內赤城著

總說

恭く惟ふに我日本。昔時　神孫都を橿原に奠め。中原を平定せし以來。寶統一系天日と光威を同ふし。五畿八道三府四十六縣既に疆域を明にし。儒佛二教能く政道を輔翼し。民衆四千餘万能く忠孝の天節尊　皇愛國の正理を躰し。以て神佛に敬事し。又能く祖先を奉じ男女別を正ふし鰥寡孤獨を恤むの至情を存す。地は假令東瀛の一方に横はる絶島國たるも。五大洲中比論なきの樂國なり。今や此の新天地と成り。海外諸邦の交も日に親密を加ふるに至る。願くは自他平等の公道に基き。皇德國恩の優渥なるを深認し。苟も樂國を樂しと苦境と爲すの失無かる可きを。是れ吾等民衆の宜く任す可き所ならずや。聊か一言を筆し之を新天地の總說と爲す。

國都

家あれば事あり國あれば政あり。既に國ありて。君主之に臨み百官之に坐し。政を行ふ處を國都と云ふ。乃ち上下の便に隨ひ地位を定むるは其宜き所にして。山河の險道路の便亦之を擇ふ可し。府縣州郡市邑の如きも。固小國たる者なれば其首部の宜きを擇ふ固其

所たり。我邦の都城其遷轉古來一ならず。今や江戸を以て都城の地と爲すに至る。時勢の宜に隨ふと雖。江戸の地たる有事の日虞あるを免れ難しと云ふ。余以謂らく。甲斐の國たる江戸を距る遠からずして。山岳四方を圍繞し。平野其中に横はり。規模自から大にして。甲府の側に山水の勝も亦具はるの地あり。是れ平時も離宮の設ありて。有事の日に備ふ可きの地ならんか。

内閣

地位を國都に下し。上　君王を奉し下億兆を安せんとを期し。國政の大本を握る諸官を大臣宰相と稱す。其政務を行ふの處を内閣と云ふ。其位地たる高燥幽靜にして。其築造の如き苟も華美ならんよりは。寧ろ端正清儉ならんを要す。而して閣内の首部には古聖賢の詞壇を設け。百官禮拜を行ふ可くし。又諸房室には古聖賢の畫像幷に格言等を書したる幅軸を掲げ。百官登閣の時默坐沈居の間にも其意志を戒愼恐懼に注き。報君安民の忽にす可からさるを期す可くす。其他諸官署諸學校にも之に準し。古聖賢の畫像格言を掲け置き。各職員の其職を忘れさらんとを要す可し。夫れ人の行は思想に出で。思想は耳目の觸るゝ所に生す。内閣諸官署諸學校等に。古聖賢の畫像格言を掲け置くと。豈に無用視す可けんや。試に各人各戸にて之を行ひ知る可し。

神社佛閣

或曰く。神社佛閣は神佛の居宅なり。神佛にして靈なしとせんか。大金を費し巨材を伐り築造を勞するの繁なきも可なり。既に其靈あり人心自から之を畏敬尊信するを知る。故に其築造の勞なかる可からず。是れ神社佛閣の缺く可からざる所以なりと。夫れ然り。況んや古社寺の如きは最も然り。古墳墓の如きも亦然り。但夫れ小社小寺の如きは。之を大社寺に合し民費國用を減省するも亦不可なかる可し。而も古社寺古墳墓の如き。古迹古墟と一般。古神佛古聖賢遺靈の存する所。民衆信仰の屬する所。之を保持するは即國家を保安ならしむる者にして。之に屬するに田園山林を以てし。其改築修營及ひ祭祀の費に充つる法最良の事にあらさりしか。我邦古來御朱印地と稱する者を神社佛閣に屬し來るの制の如き是なり。而も今や其制廢せらるゝも。是れ舊制に復するを最上の計とす。然らされば却て社寺の修營改築に臨み。費を民衆に負はしむるの多きは慨す可きの至にあらさるか。況んや古昔　帝王遺詔の地高野山の如きは最も舊に復す可し。又高野山には婦人の上るも禁ず可し。古昔　帝王の遺詔之を奉ぜざる者とせば。國躰の變遷は論を需たず。古來の聖賢夙に治國安民に卓見あり。社寺に屬するに御朱印地除地を以てし。其基礎を鞏固にし來るや明なり。苟も之を輕忽にし省せさるとせは。國家千歳の計何を本として保たんや。其本既に立たずんば。如何にして外客を服す可きや。

農工商及ひ物産

草木を種え禽獸を養ひ、虫魚を生育せしめ、以て木材穀物野菜其他飲食衣服宮室の用に供する原料を造る者、之を農と曰ひ、又天然物を海山より採り、又は農の造りし品物を以て、飲食衣服粧飾家室其他百種の物を製作するを工と曰ひ、農工の製造する貨物を賣買するを商と云ふ。農事盛なれば工も亦盛なるに至る。農工盛なれば商業も隨て振ふ。商業の振ふときは農工亦盛なり。故に國の富を欲すれば農工商三業を妨害せさる可し。商家其業を營まんと欲するも、金銀の不十分なるときは其業亦十分ならす。其餘轡農工二業に及ふ。故に政府國民に課するの租稅其當を失す可からず。若し其當を失すれば、三業共に衰へ國貧弱なるに至る。是自然の勢なり。又外國人雜居の今日一事業を興す者、宜く同業者の一致合同を旨とするは、大業を爲すの最良計ならんか。今農工の出す所我邦產物極めて多しと雖、養蠶家の出す所生絲の如き亦其一なり。余以謂支那、我邦に隣り、土壤廣大にして未開の地猶多し。今後彼にして業を墾闢に興さば、桑蠶も亦盛ならん。此に至らば、我邦の蠶家は其業立たざるに至らざらんか。而かも品質の最良なる者を出すときは、之を以て其害を防ぐに足らんか。我邦支那に隣り風土相同しくして、今我邦に蕃殖せしめ可き者に、驢馬あり、木棉あり、其他動植物中に、之を我邦に携へ來りて、培養し利益を得る者蓋し少しとせず。

博物館及ひ共進會

万國の奇品を一場裡に陳列し、民人をして自在に觀覽せしむるの處を博物館と云ひ、又農工諸家平生精意精神を凝らし製作し來る品物を集め、公衆に縱覽品評せしむるを共進會と云ふ。共に是れ勸業勸善の場なり。一善より衆善に進み、一惡より諸惡に進むは、人の常情なり。人皆譽を求むるの心あり、功德を立つるの志あり。爲めに善に進み業に勵むを常とす。一品を製作し一物を發明する、其世を益するの大なるは人生の譽なり。亦美事ならずや。坐なから万國の奇品を縱覽す。博物館の世を益するも少からず。能く人をして善に進み業に勵ましむ。共進會も亦最良事なり。

學校

小は進退應對灑掃、即ち居立ち戸障子の開閉、言語應答の仕方、庭や室內の掃除より、大は治國平天下に至る迄、文武百科の事を學ふ場を學校と云ふ。鄉に小學あり、縣に府に中學校あり、師範校あり、國に大學あり、以て人才養育を是れ勤むるは盛なりとす。然るに方今學者或は男女其別正からず、口に道德を唱へ、心に道を思はず、不肖吾生か如きも亦其匹儔を免れず、歎息の至と謂ふ可し。是れ心意を沈むるを修せしめさるの爲す所か。願くは中學以上諸學生には、僧家の修する坐禪の如き事、漢儒の所謂齋戒の如き事を修むる一科を設け、之を修めしむるときは、其精神上得る所の利益大なるのみならす、腦病を患ふるの害を免れしむ可しと。小學生徒の如きにも、神佛を禮拜するとを朝夕必ず行はしむ

るを良とす可し。又帝國大學を立つるの位置は。函根山上の如きは最良の地なれは此に移す可きか。苟も心意を沈着ならしむるの事を修めしめされは。如何に博識達智なるも。其用を爲すに至り成功僅に相半するにも及はさらんか。蓋し精神を沈着にするは德育の一部なり。生徒をして之を修せしむるには。教師自から精神を沈靜にし。擧動を整肅にするは。無爲にして化するの良法なり。小學生徒の如きは。學校内に工場を設け置き。教師之を監督し。課業の外毎日一二時間宛。藺繩を作り草履を作る等の工事に服せしむるか。又は掃除を爲さしむるの事ある可し。是れ生徒に良習慣を付するの法なり。學問は名の爲めにするにあらす。利を貪る爲めにするにあらすとは。古人の格言なり。又數万卷の書を讀むも。思はされは。則ち一卷の書を讀むも。思ふとの深き者には其功の及はさるあらん。又方今の學校學田の屬するあるを聞かす。學校を永久に維持するは學田を屬せしむるの良法に及ふ者なからんか。願くは各地散在の官地區々の者の如きは。之を學田たらしむるは如何そや。且つ東京留學生の爲めには。資金を減ずる爲め寄宿舍を設く可きなり。而して文部省之を監督せは如何そや。且つ諸學校共に市街を隔て設置す可し。

河川道路

河川は水路なり。舟筏來往の路なり。道路は陸上の河川なり。人馬及ひ車駕往還の路なり。河川の源は山岳なり。山岳樹木の多からさるときは霖雨一たひ到る。河川の逆洪する知る可し。淵瀨相變するも亦知る可く。舟筏來往の間。塵土又は石芥を投するの久きを積む。水底爲めに淺きを加ふ。道路及ひ橋梁は車馬往來の爲めに毀損すると最も多く。人民歩行の爲めに害せらるゝ事は僅少なり。河川は常に浚渫を行ひ。道路橋梁は修造を行はさる可からす。其費を負擔せしむ可きは。河川に在ては舟筏を來往せしむる者。道路橋梁の修造を負擔す可き者は。車馬を來往せしむる者是なり。河川道路橋梁の利固より大なり。其利益を受くる者も。浚渫及ひ修造の費若干を負擔す可きは至當にして。舟筏車馬を往來せしむる者より其費出るときは。各人も間接に其費を辨するに至るは自然と謂ふ可きなり。

神職僧侶及ひ教員

神明に奉事する者を神職と云ひ。佛に奉事する者之を僧侶と云ひ其名異なるも其實は一なり。學生を教授する者之を教員と云ふ。神職僧侶と教員と其爲す所同じからざるも。身に善を行ひ公衆の龜鑑たるに於ては毫も異なるなし。故に神職僧侶には子弟の教育を任ぜしむるとある可し。苟も神職僧侶教員にして。其身を忘れ良心に背くとありとせは。神佛之を恕せず。公衆をして其罪に報ゆるとあらしむ可し。殊に僧侶の如きは身宗教を奉するを旨とするの職にして。佛祖より受くる所の戒律の下に在り。俗人に同じき行爲ある誰か之を尊信する者あらんや。且僧侶は兵役を免し且政事に關渉せしめ。其籍を

世俗に異ならしめ。入籍出籍の法を嚴にし。苟も破戒の甚き者の如きは宜く除籍す可きなり又其結婚肉食を禁し。頭上に髮を長せしめす自から俗人に異ならしめ。婦女を寺院に同居せしむる如きことを嚴禁するは各宗々制に屬す。神職教員と雖身俗人にあらず。故に唯政令の下に立つのみにて。其職責を盡すものにあらず。其讀む所授くる所の書果して如何なる事をか載錄せらるゝや。神職僧侶教員共に其責任輕からず。而も衣食住に心の奪はるゝときは。亦其實を盡し難きの內情あり。故に政府も保護厚かる可く。公衆も之を輔翼するの道ある可し。且つ夫れ佛教には五戒十善戒あり。既に俗人も之を守るを分とす。況んや僧侶にして結婚肉食す。俗人に別なきを如何せん。又神職と曰ひ僧侶と曰ひ教員と曰ふ。皆多年螢雪の勞苦を積みし者なるに。其公衆より報する所は僅に土木傭役夫の俸給にも及ばざる者を以てし。其神職其僧侶其教員を得んと欲す。亦難しと曰ふ可きなり。聞く所にては。神職僧侶に贈物を爲す。百年前物價今日に比し十分一の時に同き金錢贈物を爲すありと云ふ。是れ如何に神職僧侶道德を任する者と雖其冷遇に忍耐し居るの易きあらんや。但夫れ德は本財は末なれば。身公衆の上流に位する者。神職僧侶教員の如きは。宜しく艱苦缺乏に耐へ精勵以て道を行ひ。德を脩むるの久きときは。公衆も亦傍觀坐視せさるや明なり。飲食の人は之を匹夫と謂ふ。苟も松栢歲寒の節を守る。春風習々氷雪影を歛むるの時あらんとす。身に絹布を纏ひ酒肉に耽り。坐するに暖蓐あり。行くに車あり。寢に妻妾あり。以て飢寒を訴ふ誰か之を信愛する者あらんや。

衣服頭髮

國民既に華士族平民の等差あり。士族平民上中下の同しからざるあり。男女老壯長幼の別あり。然るに衣服頭髮其他裝飾に一定の制なきは。國俗の根基立たざるに似たり。大禮服の如きは其定制あるも。平日と雖服裝の定制ある可きなり。其地質又は色を別ち文飾を異にし裁縫ある可し。又頭髮の如きも髭鬚眉を剃ると否との如きも。各一定の法莫かる可からす。衣服頭髮は人の性情品位を表する者にして。從其の婦人眉毛を剃らず。白齒を涅せさる者の中には。貞節を亂るゝ者あるか若きは。既に掩ふ可からさるの事實なり。又家屋製造の如きも。提灯の紋章の如きも。皆定制ある可きなり。我邦今日是等の制定まらず。故に風俗頹敗を歎する者あらしむ。文物百般却て德川幕府時代に比し或は退歩の傾向ある者少しとせず。外形より內心に及ぼす人間の常なり。世に道德衰微を說く者あり。て。意を是等に留めず。豈に怪事と謂はさる可けんや。

病院及ひ貧院

家富むも病ある者は。身健にして貧なる者に同し。鰥寡孤獨と廢疾とは。古來人の恤むを常とす。病院は百病を療養する所にして。我邦各地其設あり。稀には貧者に施療を爲すもあり。醫家慈善の道ある喜ふ可し。然れども。貧院の如きは未だ其設あるを聞かず。世の貧

者を救ふ工場を立て工事に服せしむるも其一法なれども支弛不具にして頼るに人なく又は子女の多くして良人早く沒し頼る可きの人なき者又は父母早く沒し頼るに人なきの徒盲唖の徒の如きは貧院を立てゝ之に入り適當の事に從事せしめ養育以て人たらしめ病者には治療を加へ專ら救恤を旨とするの場無かる可からず世に志あるの人士は飲酒の料を減し以て此等の爲めに資を抛つあらは陰德の陽報偉大と謂ふ可し我邦貧院の設今日に於ても未た之あらす但盲唖學校の設たる東京に一箇あり貧院の如きも類似の者は之あるも尚完全なるにあらす貧者の子女は或は西洋人の救恤する所と爲り彼等をして却て其の德に懷き我邦人を怨ましむるなきを保たず各地貧院の設あり盲唖學校の如きも之に屬せしむると必要ならすや加之農工業を發達せしむるには其母幼兒の妨を避くる爲め幼稚園及ひ子守學校の如きも遍く各地に設立せさる可からす且女子不就學の者僻陬少しとせす是れ子守女子教育法の普及せさる爲めなり我邦貧院の設なし　英照皇太后崩御の日御遺訓に由り四十万圓なる巨額金を諸府縣に下賜を辱する者是れ救恤事業の基本金ならすや各地當局の人士以て如何と爲すや是れ吾等四千万國民は其辱きを感佩し且永遠に之を保存し去るの道深く思はさる可からす世人云ふ貧院を設くるは貧民を多くするの憂ありと謂ふと雖是れ其法の宜しからさる爲めなり貧院豈に設立せさる可けんや但貧院と病院とは宗教の下に屬するも亦可ならんか。

書籍新聞及ひ圖畫

國に利害を起すの具は文書圖畫より大なるはなし書籍新聞雜誌繪畫小說稗史俚謠の如きも其發刊は最も忽慢にし難き事業なり之を業とする者小學近思錄忠經孝經四書五經等の經典を讀み道心の根本を立て其事に從事し政府も利害を明にし其草稿を點檢し時としては訂正せしむるとある可し學校所用の教科書は無論兒童の玩具繪草紙繪紙も皆害ありと認むる者は其發賣を禁せさる可からす人の行爲を記するに善事あり惡事あり惡事醜行を記す或は懲惡に似たれとも暴を以て暴を伐つ其筆者自己人を誹議する者と爲るを如何せん筆者の意を用ゆる所此に存す無限の功罪此より生す宜く深く思ふ可し。

諸禮

禮は家を保ち國を安する道にして屋宇の柱梁に異ならす其一を改むれは他も亦改まるの憂あり故に家國を保つ者猥に之を改めさるを吉とす人の眼耳鼻舌手足頭身の一舉一動皆な禮にあらさる可からす立つとは齋するか如く坐するとは尸の如し是れ禮の極なり心恭敬を思ひ言行疎忽輕躁なるは未た曾て之を聞かす鸚鵡能く言ふも飛鳥を離れす故に唯口に禮を言ふ徒爾に屬す禮の物たる家に鄉に國に到る處之なきはな

し。法律制度は其一部とす。禮に吉凶あり冠婚葬祭贈答送迎の道あり。人目して虚禮と云ふ者の如きは。中心に恭敬愛憐なく外形のみを重するを云ふなり。冠婚葬祭の如きは最も重んす可きの禮なり。冠婚は始にして葬祭は終なり。喪には其哀を盡し祭る神在すか如くす。是れ外形外容をのみ謂ふにあらず。喪と祭と我邦古來定例あり。今や亂れて之なきか如し。婚も亦定式あり。冠は我邦其禮なきも。維新前に在ては前髪を除くの禮ありしと。是れ冠禮に同じきなり。維新以後此禮遂に消滅に屬す。願くは相當の年齒を以て之を行ふとある可し。其他婚と曰ひ葬祭と曰ふ。皆一定の法式を定め。國民をして實踐せしむると當局者の任務に屬す。其他年始年末佳節等の禮も。皆西洋曆の行はるゝと共に。區々錯亂するや久し。禮も亦難し。

山林原野

山林原野は。官有と民有とに論なく。樹木無き處は務めて樹苗を植付くるを要す。若し樹木あるも良樹木ならず荆棘の如き者は。刈り平けて大木良材たる可き者の苗木を植付くるを要す。且つ林務官事務を行ふに當りては。地方官之に立ち合を爲し。其事務の正實に行はるゝ樣せらる可きなり。且土地に隨ひ或は田園の肥料に用ゆる草を。山林原野に刈取るを目的とし。山林原野に樹木少きを望む人民ありと雖。田園の肥料は草に限るにあらざれば。他の肥料を用ゆるとを勸めしめて。專ら苗木の植付を行ふ可し。若又大木の出來難き土地の如きは。開墾して以て田園と爲し又は牧場と爲す可きなり。山林原野に限らず。堤防道路其他の空地沼澤の如きも。皆な相當苗木の植付を行ひ。官民の害無き地は寸地も洩すことなかる可し。就中人家に妨なき限は。市街の兩側にも。電信柱に幷行し。東京大阪を首とし。相當苗木の植付を行ふは。人民の心目を爽にし自然風俗を改良する德育上に裨益あり。且つ火災を豫防し。又は大氣を清淨にし。民人の衞生を益するも大なる可し。又各地溝渠の汚泥の湛へある地は。皆之を掃除し。菖蒲の如き水草を植つけ置くを要す。又沼澤の如き地にして。水族の多からざる處には。魚苗の種付も亦必要ある可し。國家經濟上は無論。一家經濟上にも木竹を培養するは最良の計ならずや。又世上神佛に獻するに蛇足にも華表又は燈籠を以てす。是れ益なきに大金を拋つ者なり。試に之に代へ樹苗を獻栽するときは。華表燈籠は腐蝕して。何人の獻ぜしも知り難き日に至り。其獻栽したる檜柏樅杉は。蓊鬱として天上を掩ひ。人をして數百年前を追憶せしむ。此時や其遺族子孫は。樹木の榮ゆると共に榮へ。祖先功德の大なるを思ふあらん。神佛の保護。此の功德ある者の子孫を空ふせざるは必然なり。願くは各地社寺の近地樹苗を賣るの賣人ある可く。又社寺にても其事を輕便にするの法を設け置き。衆人をして樹木獻栽を容易ならしむ可し。樹苗を植付くるの事特に山林原野に限る可らざるなり。

上古の世民人質實にして虛飾なく文飾なし。故に其身心亦惱苦の少なかりしを想ふ。下りて今の世と爲る。飲食衣服維れ美維れ競ふ。民心爲めに惱多く。人身爲めに苦多し。曰く茶曰く酒曰く砂糖曰く煙草。世間此の贅物あり。民人爲めに惱苦を感するや多し。世間此の物なしと雖。人娛樂なきはなし。此贅物人工に出つ。其人工に賴らす。天然に香味を具する者世之に乏しからす。茶酒砂糖煙草皆贅物なり。而も之を喫するの久き。習慣の深き。其嗜好を絶たんと欲するも難し。由て思ふ。慾は恣にすれは益多慾に入る。之を絶たんか。減するときは終に絶つに至る可し。烟草を喫する爲めに衣服を然燒し。又は路上之を喫し。或は人の家屋を燒き。又は山林を燒き。自己の嗜慾の爲め害を世上に被らしむ。獨り烟草のみならす。皆恐れて慎む可きなり。但世に行はるゝの久き亦已むを得さるか。

金銀珠玉綺羅錦繡

金銀珠玉と綺羅錦繡と。以て頭髮を飾り衣服宮室車馬を飾る。皆是れ光色人目を娛ましむるの具に過ぎず。共に高貴人の用たる可く。貧者の償ふて服飾と爲す可き所にあらず。其人を煩はし民を苦ましむる眞に淺からず。其の要人目を娛ましむるに過きされは。野梅山楓の雪に傲り霜に醉ふを觀。又は瀑泉の水晶簾を垂るゝか如き。苔岩の繡衣を着するか如きを觀ると。其心孰れか快なる。其威儀を飾るは無用にあらさるも。爲めに心身を惱苦せしむるを免れす。其他琴三絃鼓笛の類も鄭聲の具なれは。重稅を課し其數を減するに至るを勸む可きなり。

醫士辯護士

醫は仁術なり。辯護も亦仁事なり。人の疾病を治し生命を救ふと。人の生命財產を救護すると。其德たる幷に高し。共に敬愛す可き業務なり。然るに世人或は醫士を視るに賣藥家を以てし。辯護士を視るに射利家を以てす。是れ其人を知らされはなり。曰く醫士曰く辯護士。已に其業に從ふに先ては。少くも十數年の勞劬を積み。殆んと眠食を忘るゝなしとせす。其間學資の費ゆるとも大なりとす。其人たる皆道德敎育も受けたる者にして。人倫の若きは常に講し來る所なり。世人の視る所管を以て天を窺ふのみ。醫士辯護士前陳の外別に重大の任務あり。或は外國と紛論の起るに際しては。之を治理す可く。又一人の病を治し千万人を治するに同き功あるとあり國を泰山の安に置き民を未た死せさるに救ふ。醫士辯護士其職輕からす。其最も要するは精神の清涼を保つと是なり。辯護士にして精神清涼ならされは。事を一瞋の間に誤り。醫士の如きも亦然く精神清涼ならされは。他の精神病患者を診し。細微の病理を推究す可きなし。心膽練磨の事豈に輕忽にす可けんや。苟も身中人以上に位し問學に公衆に心意を注く可きの人は。總て自己精神浮沈の。無形中に影響を世上に引き起すの小ならさるを認めさる可からす。況んや其言行に發するに於ては其利害亦細微にあらす。其功罪共に天壤と窮極なし。一朝國に事ある。其局

に當るの士にして。精神の沈着ならさるときは。一席の茶話一笑に付し去る可き事も。數十万の兵旅を動かし。天下民心をして恟々然たらしむ。毫釐の差千里を誤る恐る可きなり。身上流に位する者。醫士辯護士にあらさるも。亦職責皆重からさちんか。

儒佛二教

儒佛二教は東洋の公教たる既に久く。今や世界各國の名教と爲る。況んや我國の如きは。此の二教民心風俗を涵養し來るは夙に千百年にして。文物百般二教に由らさるはなし。假令神道の傳はるあるも。苟も儒佛二教の存せさりとせは。神道の要果して何くに在るを解す可からさらんとす。其教祖德化の恩露吾等民衆の身心を化育すること。天恩と皇恩とに比し厚薄を別つ可からさるなり。吾等民衆の祖先世々も之に沐浴し來るや久し。祖先世々既に之に沐浴し來りし者。吾等其子孫として之と端を異にし。儒佛の教を棄てゝ他の邪教を奉し。又は其身の如何を省みす。無宗教者なりなとゝ自稱し居る者ありとせは。果して是れ如何そや。吾等民衆の身心は。儒佛二教と天恩と　皇恩とを以て作られ。又支配せらるゝとは日を視るよりも昭なり。豈に假令之を外にせんと欲するも得可けんや。宜く深く思ふ可きなり。

陸海軍

或曰く。國に陸海軍を備へ。軍艦砲臺要塞屯營望樓其の他造兵所調馬場火藥庫を屬せしむるは。內亂を鎮定し外寇を防禦するの二件に外ならず。故に陸海軍の用却て平時に在ると多しとす。陸海軍の用平時に在ると多しとは。古人の所謂不戰して人の兵を屈するを云ふなり。其の戰時の戰に勝たんよりは。寧ろ平時の戰に勝たんを期す可きなり。何をか平時の戰に勝つと云ふに。第一には國民の精神是なり。第二には國民の富裕是なり。第三には兵衆の練熟と糧仗の完備是なり。此三者既に敵に平時に勝つにあらされは。戰ふを雖百戰百勝を期す可からす。兵氣如何に强健なるも兵衆如何に熟するも。國民富裕ならず糧仗完備せざる。如何にして戰ふを得可けんや。陸海軍の設固缺く可からす。而も國力の程度を詳にし。殖產に力を盡す固に國家の急務なり。軍艦宜く多かる可し水兵も宜く多かる可しと雖。但常に之を備ふ。國力を減縮するの恐あり。故に軍艦の多き。平時は則ち其若干を商船に用ひ。其兵丁は漁業に商船に從事せしめ。陸軍兵丁の如きは。三年の在營を二年乃至一年に減し。三年中の一年又は二年は鄉里に在り。各其家事に服するの間に於て。在營に同きの思を以て。既に練習せし百事を遺忘せざる爲め。時々簡閱點呼を行ひ。其際に於て簡單に百事を試問し。又技術を温習せしめ。簡閱官は奬勵の爲め其點數を記し。且在鄉中の兵丁に賞罰を行ひ。且其熟知す可き百般の事を簡易に記せし書冊を頒布し。誦讀し習かしむ可し。又兵營中にて雛豚を養ひ。又は其近地に農場を屬し。野菜を作る等の事を兵士に行はしむる可ならすや。海軍兵丁も亦時々簡閱を行ふ可くし。且商船

運轉手機關手諸職員は海軍非職の諸職員たらしむ可し。又陸海軍共に將校下士は平常と雖有事の日須要の人員を備へ。實務に學術技藝に習熟せしめ置かさる可らざるは固より論を需たす。而して平時の人員は多數ならさるも。有事の日は大數の兵立に集る可くし。然る時は之に應する糧仗も缺乏なく備ふるを得て。戰はすして人の兵を屈するの法を得んと疑なき所なり。聞く所に由るに。北米合衆國陸軍常備兵は。平時一万に過きすして國土安全に治まると云ふ。彼の土地の廣大なる。人口も多くして既に是の如し。常備の兵必しも多きを要せさらんか。且將校は官宅を立てゝ之に住するの事。國用を減するにも亦其益少なからさらん。我猥に軍備を嚴にす。彼も亦之を嚴にすると我の如くす。而して彼我互に莫大の國用を消滅せしむるよりは。國務大臣外交官寧ろ其人才を得んと最も急務なる可きなり。公職に任せらるゝ者。宜く身生を犧牲にし私利を顧みす。能く忠君護國の重きを服膺せさる可らす。苟も民衆の膏血に衣食し居る。其任も亦重からんか。

官吏議員

或曰く。官吏と稱し議員と稱し。會社銀行員と稱す。其名異なるも其事同しからさるも。皆公衆に代り百般の公務に服するの人にして。其職に等差ありと雖も。任たる皆重く。民人の上流に位し其模範たる可きなり。其顯職に在る者は。一顰一笑も公衆の大事に關す。獨を愼むの道最も思ふへし。其俸祿の如き。今や金銀を以て之を定むるも。固に米穀を以て之を定むる德川幕府時代諸職員の如くす可し。且つ府縣市町村には合併分割を行ひ。大中小の名を附し。其吏員を優待す可きなり。但夫れ諸職員共に。日に公事に服し。家事に服するを得す。故に其衣食住に缺乏なからしむるは。當然の事なり。而して疾病相慰め饑難相救ふは人間交通の道なれとも。歡迎送別懇親會なとゝ稱し。飲宴醉狂濫に金銀を消費するとの流行するか如きは弊風にあらさるか。各自懇親を結ふ茶談會も亦可なり。喫飯會も亦可ならすや。抑官吏議員之を出すに道あり。曰く登庸法曰く撰舉法是なり。而して官吏には進級法あり。各其法に由る固より可なり。但未た其法の完からさるを憾む。余以爲く諸府縣知事諸公は之を書記官幷に衆議院議員より撰出する固より可なり。貴族院議員諸公亦諸貴族又は府縣知事諸省大臣次官を奉職せし諸公より出す亦可なり。而も大臣諸公之を出すの法未た一定せす。願くは是れ貴族衆議兩院議員より互撰を以て其候補者を出し。其中より　皇帝陛下の御親任ある者とせは如何そや。且夫れ諸府縣書記官又は衆議院議員諸公より。各省次官又は府縣知事を出すも亦互撰を以て候補者を出し。候補者中より次官知事を出すも。大臣諸公を出すの法に準す可し。各大臣次官知事書記官は無論。其他諸職員共に總て奉職の年限を定め及ひ懲戒令を設け之に任し。且誓約を立てしめ。其年限内は猥に免官等を爲さゝるの規定ある可し。然らされは却て國家民衆の不幸不利と謂ふ可きなり。且貴族衆議兩院及ひ府縣會議員中に。半數又は三分一は

諸官吏神職僧侶諸學校教員重なる諸營業者より其人員に應し互撰を以て撰出したる議員を加ふるの法亦缺く可からざるか貴族院衆議院府縣會と曰ふ皆堂々たる公會なり故に議員も官吏と同く公明正大其任を盡す可きなりと其れ否らざらんや且土木費を減し水火の害を起し裁判所警察署の費用を減少にし其事務を不完全ならしむる如きは最も人衆の不利ならすや

華士族平民

西洋諸國に貴族あり我邦に華族諸公あり士族あり平民あり何をか華族と云ふに舊公卿諸侯功臣諸名家是なり士族なる者は概其舊臣下なり而して平民なる者は概其下に立ちし農工商是なり華族諸公に公侯伯子男の階級あり士族も上中下士族の名稱あるも可く平民も亦上中下平民の名目なかる可からす而して其怠惰驕奢を譽とするは惡風なり但夫れ華士族平民は其名のみ其實に至りては平民華士族に勝るあり華士族平民に同きあり是れ他日沿革の起る源なり余以爲らく世襲の爵祿は華族諸公子弟を益する者ならす國を磐石の安きに保たんと欲せは是法を改め公侯伯子男五級の爵に隨ひ毎一世一級を降し遂には皆平民に歸するの法と爲す可し然るときは華族諸公子弟自然勉勵の氣象を興すは疑なく其影響も亦少ならさるなり、皇室既に典範あり華族諸公も亦之に準し公家の子は侯に侯家の子は伯に伯家の子は子に子家の子は男に男家の子は士族平民に下るを常とす可し以て其子弟を奬勵し特別の功勞あるときは侯家の子も公に進め子家男家又は士族平民よりも公伯諸爵に進ゝとを得せしむ可し而して平民士族の華族に進むは貴族院議員又は大臣大將たるか巨萬金を國事に投じ偉勳あるときに於てするを適當と爲さんか又華族は貧民救濟等公事には人衆に先ち力を盡す可し

郵便電信鐵道

世間交通の具郵便電信鐵道より善きはなし而も其局に當る者怠慢に由り音信を遲緩ならしむるとなきを保たす而して鐵道會社の如きも驛夫の類浮薄を以て旅客を待つ者あり是れ繁忙に由ると雖亦平生殷勤を旨とせざるに出るなからんか爲めに旅客をして行旅を誤らしむ又客車腰掛の下空虛なる處は頗くは箱形に造り旅客携帶の品物は之に容れ其蓋は開閉を自在ならしめ旅客は之に腰を掛くる樣せらるゝときは乘客多數の時と雖も下等客車に乘るの旅人も其便益を得ると尋常にあらず又聞く所にては車掌荷車に乘り運行中荷物を竊取するの巧なるありと云ふ又郵便電信汽車汽船共に着發を迅速ならしめんとし緩慢に及かさるの弊なからんか又故に停車場を設けさるも各地電氣車馬車の如く或は某の地に特別に停車して旅客をのみ御載し切符の如きは乘車の上購求するの便を與ふるとを得さらんか又旅客乘御の時に停車場毎に警

官の出張し居らさるも。列車上に警官乘り込み居りて。旅客を監察するあらは如何にや。但車掌をして車上にて原籍又は往來の前後等を問はしめ。警官は其取締を爲すも可なるべし。但客車を改作す可し。

牧畜漁獵

牧畜と漁獵とは農工に屬するに似たるも。而も別業と爲さは別業なり。某處に空地あり。田園たるに適せされば牧畜場となし。雞鶩牛馬豚羊を牧する其益僅少ならず。假令空地ならす林木の間と雖。牧場とす可きを得可し。又家々にて雞豚を畜ふ。一家にて雞三頭豚一頭を畜ふとせば。全國にて畜ふ所は毎年數千万の金額に至る可し。些少の業を營む家なれば。雞三頭豚一頭を畜へば。其家より出す租稅の如きは。是に由り出る利益にて餘ありと知る可し。其卵其肉人身を養ひ世に益ある者少しとせす。漁獵の事天物生殖ある者を殺害するの業なれとも。虫魚鳥獸を殺すも。人民を救ふの益ありとせば。亦善業と爲す。但漁獵者の妨害を受くる人亦少しとせす。但政府の禁令を守り。時期と地位とを犯すとなく。乃ち世に害なきを所り。其事に從事せば亦好事と謂ふ可く。富國の幾分を補ふ者と稱す可きなり。其人を害せんとを慎むべし。

俳優講談師諸藝人

身に綺羅錦繡の衣裝を纏ひ。頭に樣々の鬘を冠り。男に化し女に變じ。老と爲り幼と爲り。貴人に擬し賤夫に摸し。戲言百出舞蹈千態。以て古今の珍事を演する者。是を俳優と爲す。其觀者を感動する固より多しとす。亦勸善懲惡の美技なり。而も此中勸惡の擧あるも之を免れす。政府宜く之に諭す所ありて。又保護を加ふるを以てし。其技を正肅ならしめ。益其世に補あるを勉めしむ可し。講談師義太夫語。其他諸藝人皆な其淫猥の語を演ぜざる樣改訂せしめ。以て某宗教の下に屬せしむ豈に可ならずや。

賞罰

此に人ありて國法を犯すときは政府之を罰す。政府未だ禁ぜざるの惡行は天之を罰し。其心亦之を快しとせず。是れ自然の譴罰なり。今此に人ありて。父母に孝に兄弟に友に朋友に信に。子女に慈に婢僕に仁に夫に貞に婦に温なるあり。又は國の利害を案し良策を立つる者等にして。國君に忠良に國人に敦厚なるあるときは。天必之を賞し。人必之を敬愛し。己れ必其心に快しとすと雖も。政府も之を賞す可きに或は洩れて賞せられざるあり。願くは政府宜く其調査を嚴にし。賞典に與からしむ可きなり。唯一通の令を發し郡衙村署に其調査を爲さしむ。郡吏村吏其繁務を厭ひ。或は其概畧を得るも。官令の雛形に違ふを以て。有れとも無きを以て答書を作り。政府に出すとあり。是等の事たる隔靴の歎も亦深し。且賞罰は衣服にも其章を附着せしめ。公衆に示すの必要あり。又方今の法律奸淫罪を罰すること最も寛にして。和姦の如きは之を不問に附す。是れ密賣淫の諸處に行は

るゝ原因なり。賞罰の事宜く遺漏なかる可し。又官吏にして侮辱を受け。其理由ある者は其人をも罰せらる可きか。是れ其不德行なればなり。

婢僕

婢僕は家事を助け備役に服する者にして。年少者其多きに居る。故に世に經歷の多からず。假令經歷の多き老婦老夫の如きも。老て人に備役せらるゝ位の者なれば。亦少年男女に同く。其少年老年を問はず。婢僕なる者は。概事物に輕忽なる者を多しとす。故に之を備役する人。意を盡して事物に注意せしめざる可からず。殊に火器火具の使用。即ち飲食物の煮燒。又は薪炭の取扱。又は燈火爐火に意を用ひしめ。且然燒し易き石炭油の取扱。其他浴湯を煎るとき等万事に當り。所謂火の用心を怠らしむ可からず。渾て事は注意に過失あるはなく。過失なき者とし注意を怠るに由り過失ある者なれば。最も慎む可きなり。且夫れ旅舍下婢の如きは。旅客の眠る枕上に近く活火を盛る火鉢を措く等の事あり。其備役者たる者嚴禁す可きの事ならずや。世に戒嚴すべき事多き中にも。最も戒嚴を怠り難きは火を使用する婢僕に注意せさる可からず。瞬時に火を誤る時は。万家の市街百里の森林も。俄然灰燼に歸す。恐る可きの至なり。

外國人及ひ海外居留者

亞歐佛墨其の何の國たるを問はず。內國の人民と言語風俗は同しからさるも。皆天地間の人類なり。故に假令內外人民の區別はあるも。宜く相愛し相憐む內外の別ある可からず。但國の古迹靈地には住せしめさるも國の秘密は語る可からさるも。遠人を柔らくるは古聖の敎ゆる所なり。豈に之を犬馬視す可けんや。我邦人にして外國人を親愛するの厚きときは。諸外國人も。亦我邦の海外居留人を厚遇するは。万國交際の今日最も缺く可からさるの一事なり。苟も彼を愛する我を愛敬せしむるの道ならさるか。

渡航及ひ旅行

父母在せは遠く遊はす。是れ古昔聖人の人に敎ゆる所にして。身體髮膚皆父母の遺なれは。自重して傷けさる可きも。今の世や海外も戶內に同しき感あり。滊船電線通せさるの地なし。英に遊ひ魯に遊ひ。印度支那米佛。何れの國に到るも容易なるの日なれは。有志の士は宜く身元保證人を頼み。共に連署を以て。郡區役所及ひ府縣廳を經て。外務省に到り。其旨を申告し。海外渡航の免許券を請求し。且つ渡航の目的及ひ旅費學資携帶又は遞送の法をも詳に記し。猶既に渡航せし人に就き。又は郡區役所に就て手續を問ひ。兼て郵便電信船舶の往來貨物携帶の船賃に至る迄を熟知し。各壯遊の學を圖る亦快事と謂ふ可し。而して後に百聞一見に如かさるの格言果して區にあらさるを知る可し。啻に讀書にのみ耽るは何の益ありや。今や萬國の交通日に相親密なるの日。海外に遊ひ一業を企圖するも亦其時と謂はんか。但膽は大なるを要し心は小なるを要するの戒忘れさるを要

す。內國旅行の如きは。北海道に到るも。沖繩縣に臺中臺南臺北縣に至るも。陸に滊車あり河海に滊船あり。縱令寒暑風土の異なるも。僅に內國の中大差なきを知る。人の栖息する所誰か此に到り栖息し得ざらんや。內國各地名勝遺迹。枚擧遑あらず。其詳なるは地理誌に讓りて此に記せざるも。西南にては名勝古迹は溫泉は伊豫に道後あり。攝津に有馬あり。筑前。太宰府。藝州の宮島。播州の須磨明石高砂浦等より。熊野高野山和歌ノ浦。京都大阪南都伊勢近江は無論。東北にては江島鎌倉の勝地。函根熱海伊香保の溫泉。房州の清澄山。上總の鹿野山大東岬。鹿島香取の兩大社。及び成田岩井の兩不動。下野にては日光山。陸前にては松島多賀城。陸中にては中尊寺判官壘。又は獅子窟の勝あり。皆一遊すれば以て神心を慰め。疾病を治し知識を開發するに足る可きなり。亦以て世を裨益する所ある可きなり。今や此新天地なる明治の清世。宜く宇內の活歷史山川無宇の書も閱讀せざる可からざる。春風爛熳の好時節なるに於てをや。梧桐凋零林楓霜に染むるの候も。亦一段興味あるの新天地なるか。抑又新綠滿地杜鵑月に叫ひ。靑草池塘群蛙閙々として詩興歌情を喚び起すの新天地も亦殊妙と謂ふ可く。炎威赫々熱汗背を浸すの時。養老山に御岳新道に。蔚蒼たる樹下を清泉の奔流し。陰森たる崖肩より飛泉の降るある處に遊び。以て百歲の齋を養ひ。亦千歲の下如何なる新天地あらんなど思考するも。豈に樂天地か又閑天地か。夫れ別天地といふ可きなり。

作者曰く。凡天地の間禍を民衆に加ふる者。震雷風火。洪水旱魃。疾病戰鬪。奸臣賊子。邪說猛獸。其最も大なる者なり。之を防ぐの法豫め講せざる可からず。故に宗教あり學藝あり。法官警吏あり。兵營軍艦あり。土木工事あり。病院あり育兒院あり。然れども民衆未だ禍を免るゝの全きを得ず。願くは四方の高士清意を此に注ぎ。更に民衆をして禍害なからしめんことを。乃ち其一斑たりと雖。山野郊原は論を需たず。道路堤防市街村落に論なく。天下到る處遍く樹木を增植し。以て水源を養ひ。以て水旱疾病火災の虞少からしめ。池溝河川を深ふし更に灌漑の便を起し。水田を變じ乾田とし。乾田を化し水田と爲し。以て一塲の田皆能く稻麥兩收穫を得るに至らしむるが如きも。民衆をして神佛を篤信せしむるも。博識達才を巷閭に滿たしむるも。路に遺たるを拾はず。行く者は皆道を讓り耕す者は畔を遜るの美風を起すも。梃を以て秦楚の堅甲利兵を伐つも。人力の能くす可き所宜く講究す可く。今や本邦電信柱及び鐵道枕木の用。木材の費も亦少からず。況んや人口は年を逐て增殖す。產物の出るありと雖。後世を思考すれば。亦杞憂に耐へざる者あり。若夫れ山林の如きは。土墻塞柵を環らし牧塲と爲し。以て牛馬豚羊を畜ひ併て竹木を培養せば。是亦一塲の土地にして兩途の利あらんとす。是の如きの擧たる。小なれは小利あり。大なれは大利あり。四方の高士。宜く力を合し以て大利を得るの擧ある可し。且夫れ戰鬪の如きは。方止むを得ざるに出つゝと雖。國害も最も偉大な

る者なれは。願くは百尺竿頭一歩を進め。災害を未發に防ぐの法固に忽にす可からざらんか。古人曰く百戰百勝は一忍に及かずと。美なる哉此語や。戰鬪を未發に止むるは。夫れ文教か將た德教か。國人を擧て德教を體し。能く忍辱知足の道を得て。以て農工商に殖産に勤め。以て宗教を盛にし以て兵備を嚴にし。以て內憂外患なきに至らんとを。是れ思はざる可からざるの一大事と爲さんか。且夫れ。各教各宗相誹譏するは目下宗教家の通習なり。是れ教旨宗旨に背戻するは論を須たす。外國人雜居の新天地。彼此の別なく人類相愛し。相誹譏するを愼むは一大要件なり。此の一事より相殺生するの奇變を生し。又戰端を開くの勢に至るも測る可からされは。彼我國人一般之を愼むのみならす。廟堂に立つの諸賢士及ひ宗教家たる者は最も注意す可きなり。又官報あり新聞ありと雖。民人須知の律令は。政府之を地方吏員に命し細に口達せられん事並に貧院設立等。豈に今日の急務ならさるか。

新天地 終

新天地附錄

名靈集の序

山縣玄淨

日本佛教惣本山の資格を有するものは高野山なり。白雲重々金剛の定窟を掩ひ。青山巍々都卒の內院に接す。數万の石碑は苔衣を帶びて古杉老檜の下に影を交へ。幾百の寺院は。清風明月の間に梵唄を奏し。草に万年草あり鳥に三寶鳥あり。金堂の金碧。大門の大妙。見聞覺知悉く靈異ならざるなし。彼紅塵万丈の中に在りて大本山と稱するものと同日の論ならんや。全國の民人貴賤老幼來り賽する者。年幾萬を以て數ふ亦盛ならずや。況んや圖書の珍奇歷史の考據德教の根柢たる者夥多なるをや。其境の清寂高雅。之を彼の天台嵩山に比するも相讓るなからんか。身一たび此境に登る者。能く俗腸

を洗ひ仙風道骨を養ふことを得る豈に鮮少ならんや。頃日津田天眠生。名靈集なる者を著し。以て登山人衆の手引草に供せんとす。前岡主人來て序を予に求む。高野の勝地たることは。古今の文客既に之を詳盡せり。予亦何をか言はん。唯日本佛敎惣本山の資格を有するものは高野山なりとの一語を冠らしめて之を序とす。

讀史年表序

鹽谷時敏

近世統計之學盛行。凡人事大小。無不表而列之。以瞭盛衰得失於一目之下。而人事之尤大者。莫歷史若焉。苟欲究其終始原其本末。以詳興亡成敗之跡。非由年表之用。何以致之。況世運益旺。万國交通。一盛一衰。興于彼亡于此者。讀史者之尤所宜用心也。先是清宮棠陰著新撰年表。始揭泰西諸國。然記事大簡。不足考據。至西史年表万國年鑑四裔年表等。記載雖詳密。頗失於繁碎。而近二三十年事。皆不及擧載。學者病焉。如宮內翁此著。詳畧得宜。選擇甚精。且記事至明治某年而止。其惠後學也大矣。顧翁少從先王父學。今齡踰古稀。矻々修學不倦。其作表。蠅頭細字。手自校讐。其精魄有過絕人者。則後學之宜資益者。豈獨此書而止乎。

書常陸帶後

佐久間象山

水戸藤田東湖遭厄日。傷其君之屈寃。著常陸帶二卷。以稱揚其美。癸丑夏米利堅事興。朝廷起水戸太公。參決大議。其在禁錮如東湖。亦皆得恩宥。再又用事。是雖由事變。常陸帶之著。與有力焉。余聞之而未及見其書。甲寅春。聞下田之議略定。謂非至計。乃欲由東湖啓於太公。以夜詣東湖。時方三更。東湖猶在公。竢少時始歸相見。陳所見。更與談論時事急務。漏闌而訣。蓋不與東湖相見二十餘年。至此相遇。頃刻又逼迫時事。不遑叙其平生而問其著書。尋予得謫北。歸後一年。江戸地大震。東湖死之。偶得此書而讀之。俯仰疇昔如昨日事。而東湖則不可復見矣。因大息流涕爲

書其後。

送宮本篁村歸潮來　卷弘齋

秋城社近燕飛々。客夢連宵繞釣磯。書劒嗟吾經歲滯。江湖羨子得時歸。
請看今後興懷足。休說從來心事違。正好映門霞浦水。一條淨碧濯征衣。

訪宮本茶村留宿話舊　梁川星巖

風景人稱桃葉渡。詩情我羨浣花村。殘鶯語々能留客。春水溶々欲到門。
十歲無端爲契濶。一樽忽此得溫存。髯顱雖禿猶餘舌。未害文章與細論。

遊于晃山觀華嚴瀑布　林萩村

山道遙尋大谷源。忽看素練半天懸。千秋水激石皆裂。六月霜飛人欲仙。
白鳳將飛伸健翮。銀龍相戲躍深淵。百川向海朝宗後。化作雲霓是此泉。

遊大洗濱　宮本潮來

宇內壯觀唫裡收。快然好此試淸遊。風濤望廣三千里。雲岸秋高百尺樓。
歸艇來留斜日外。危岩亂綴古磯頭。濃烟一道船何去。絕海誰能創遠謀。

次客遊詞草中詩韻　伊藤蘭林

百花撩亂舊園林。小徑草滋春已深。邂逅留君吾願足。一宵投轄好論心。

信濃川舟中作　勝間田蝶夢

春將深日出長安。上苑花從夢裡看。逝者如斯大江水。漫天風雪一篷寒。

送宮島發二君從星使平山圖書頭赴朝鮮國　榊原橋北

遠隨使節渡雲濤。異域謀游氣最豪。海底魚龍驚欲避。光寒腰際兩條刀。

高野山客中　坂本漆洲

古栢老杉陰幾層。万燈光冷晚秋燈。廟前人去誦經罷。林後還聞佛法僧。

山村觀梅　渡邊月前

二月山中寂寞鄉。殘寒剩雪月昏黃。梅花不省他人恨。只向春風吹古香。

賦得鶯有好音。恭賀近衛翠山公八十八高壽

田中光顯

帝寵如山爵位隆。遐齡八十八春風。黃鶯出谷音尤好。尚讓此公歌詠工。

絶句

堀岡不二嶺

客去山亭春日斜。平坡長塢好風華。斷橋人立斷雲外。一抹彩霞桃杏花。

丁卯七月十一日。發江都歸鄉。是日弟發二。從外國尹平山圖書頭赴京師。臨別賦一絶贐之。是時鄉有阿亡妣之新祭矣。

宮內鶴沼

鞍馬聲中曉氣涼。江都相去驛程長。悲心難耐此時別。弟向京師吾向鄉。

將赴晃山出門途上口占

栗本鋤雲

烟霞奇癖久纏身。佳境平生費夢神。今日重尋昔遊跡。晃山應笑白頭人。

錄月瀨一絶

岡鹿門

雪滿月明万樹梅。宛然琅室與瑤臺。無端誘出車馬客。俗了美人高士來。

甲申新年

石田茶圃

落魄江湖初度辰。三朝又會物華新。痴頑幸有萱堂在。拜獻屠蘇祝是春。

飛州途上

江木千之

山村纔認兩三家。坂路縈廻難度車。行入飛州寒氣甚。野梅春過未開花。

深院

福原周峰

深院無人氣寂寥。繁華昨夢不堪描。茶烟一榻靜於定。綠染鬚眉塵慮清。

納涼詞

森槐南

團扇搖々人散遲。藕花香處水生漪。秋聲已入蘋洲賦。月白漁船笛一枝。

靜女歌舞圖

戸田眠鷗

阿郎一別去何之。懶理宿粧殘粉姿。惆悵爲誰飄舞袖。怨腔唱出繰絲詞。

水濵

野口北巖

美人沈水々浮愁暮雨蕭々古渡秋。壓地流雲黑於土。慘風吹血蓼花洲。

三森途上　中條政恒

水脉撿來幾度躋。又携地籍向山西。溪深峰峻三森路。風雪滿天夜色凄。

朝起觀杏花　古莊杏村

今年東帝太遲々。二月杏花未上詩。捲簾忽喜夜來雨。紅得南枝到北枝。

梅花先春　高岡蕉屋

寒香御苑動清匀。遠以餘芳及衆民。請看先登第一蘂。新春却是二番春。

題楠河州圖　中澤敬哉

看回頽日樹奇勳。提劍倚天排妖雲。最欽妙算輕々着。驅役芻兵走賊軍。

奉敬候
東宮殿下。辱賜　御菓。時謁黑田陸軍中將久孝公。及高
辻侍從長修長公所呈也。　宮內赤城

山張鳳翼擁蒼灣。臺樹高連松樹間。　聖德不知何日報。吟衫辱帶　御
香還。

敬壽重野成齋先生古稀

田中光顯。西德次郎。大久保利和。岩崎彌之助。豐川良平。大給恒。
園田安賢。岡千仞。金井之恭。田口卯吉。南摩綱紀。日下部東作。深
井寛。木塲貞長。秋元興朝。北澤正誠。篠崎五郎。廣橋賢光。巖谷一
六。西村時彦。大山綱昌。加納謙。龜谷省軒。田中義成。鍋嶋直彬。古
莊一雄。田健次郎。宮本正貫。島田重禮。石黑務。細川潤次郎。大倉
喜八郎。渡邊洪基。蒲生重章。高嶋嘉右衞門。鍋嶋直虎。上田万年。
股野琢。小牧昌業。岸田吟香。三浦安。下啓助。島津忠亮諸公。開重
野博士古稀壽讌于芝山紅葉館。來會者有小野湖山。根本通明。
青山鐵槍。芳野世經。淺田恭悅。村岡良弼。國分青崖。鹽谷時敏諸

先生。朝野名士數百人。余亦辱承招邀得列席末。乃作詩以呈恭表同情。併博會讌諸先生之一笑云。

七十高齡自健全。幾經滄海變桑田。溫柔德教贊　皇化。浩蕩詞源凌古賢。到處山川清氣發。濟時志業令名傳。併將人爵與天爵。綽々持來朝野權。

從二位侯爵德川篤敬公以病薨矣。余曩與公相識者也。以故辱男爵德川厚侯爵池田仲博諸公傳訃音。乃余以舊交之故肅賦一絕以表吊悼之微意云。

天產斯人期有成。豈圖万里去何行。銀河星落清光減。暗淡悲雲鎖古城。

献櫻一樹于護國寺觀音。名曰回向櫻。以吊日清韓三國殉難諸賢士之靈。係以一絕。書以贈清韓兩國公使署云。護國寺在東京之北畔。關東之名刹也。

砲礮聲音何處存。戰塵一夢不留痕。櫻花自解冥々裡。開落年々吊古魂。

常陸鹿嶋郡太田矢田部川尻諸地。在利根川之北岸。與我北總海上郡相對。松綠沙黃與水光山色菜畦麥畝相照映。風景之幽且美。況以桃花傳名已久。謂眞武陵源亦可。一遊則使人有入仙鄉之想矣。地距銚子港水路不過二三里而已。他日其爲貴紳諸公栖隱之處可知也。

松綠沙黃處々園。清幽不讓武陵源。桃花流水春如畫。錦繡吹香十里村。

詠杜鵑燕子二首。博松井簡治君之粲。松井君。我北總銚子之人。前年以來奉職于學習院敎授。其爲人溫良恭謙可稱君子之人。余相友者有年。又如宮本五朔及其弟平九郎二子相共余從弟。亦各立身行道爲江湖所敬愛。其他舊交之士三谷仲之助本莊全之高谷恒太郎諸家得志者不少。而余也不敏宿志未成。徒以

風月吟詠消歲月。蹉跎客遊之間將了一生矣。自以比諸遊禽。則杜鵑耶抑燕子耶。既非杜鵑亦非燕子也。

杜鵑

三巴那處跡長違。澹月殘雲度翠微。爭信帝王魂化鳥。但憐客子淚沾衣。哀聲裂竹林邊迸。紅血落花風後飛。古往今來無限恨。爲誰切勸不如歸。

燕子

呢喃相語繞窓扉。歲々春風曾不違。金屋日長飛更劇。烏衣卷遠信應稀。花初開處巢方就。秋已來時雛與歸。何似人生爲客久。空歎四十九年非。

新天地附錄 終

後序

今茲已亥四月。微著新天地刻將成矣。抑余爲此擧。曩以乙未之春開其端。就勝海舟伯大人乞其題辭。次得承鳥尾得庵子爵大人及小野湖山先生之贈語。爾來奔走于四方。募資于大方諸賢。其間蹉跌百回。恰與歷峻嶮一般。或漂于北海之雪浪。又泊于南海之狂瀾。而以昨戊戌之冬。起草于金剛峰之麓。先之斷食齋戒三七日以有所祈。後今春東歸休于利根川南岸之故土以加筆削。漸得上于梨棗矣。而誠僅々之著。自愧莫可報大方諸賢。嗟呼余敗軍之將。數年之苦旅無有戰利。不可復談兵。赤城之守亦難。子房捧履之辱常自受之不知其數。報漢家之恩。則空存其志而已。報漢未成其志。坦上老人早已何去。猶有鈐韜一卷。亦足以敵秦楚之兵乎。比諸田單即墨之守。城欲陷而不陷者其幾多乎。七十二城復爲齊之有者。非所可期也。伏冀大方諸賢諒焉。

余四方漂泊之間。辱知遇者數千家。最見許親交者。則須田古眞。松井簡治。五十嵐敬止。宮本五朔。稗田三平。田中雲鶴。古內古堂。友部鐵軒。西山保之。草刈親明。古莊嘉門。三谷耕雲。齋藤文賢。中村武一。中條政恒。田中正道。坂本彌一郎。淺岡一。粟津義夫。重松寬勝。石原行璋。大島染之助。高橋安政。加藤梅泉。平山晋。須藤元誓。竹內久孝。高谷恒太郎。淺川敏靖。松本胤雄。島田濟。鈴木重事。渡邊壯藏。村岡清溪。遠藤庸二。八木始。今泉篁洲。瀧川濟。新妻英馬。戶田氏寬。加藤果。森懋。田中直達。陸實。矢野龍谷。田中學之助。伊藤哲次。西村準三。明里千賀藏。能勢思軒。濱口眞澂。水谷眞澂。淸瀧芙峰。諸名士也。他諸賢士之恩顧亦皆記之。而欲併錄之。思溢于胸間。亦憾不如意焉。

宮內赤城謹稿。

別格辱知諸大家

順序不當伏祈高恕

前田廣術　野添重一　草野素邦　田所美治　淺井春長　松村米作
新田目善次郎　東胤城　上西定三郎　一力健次郎　高橋義通　木村壯德
宇田三郎　富岡信熊　市村環次郎　戶澤精一郎　龍秀　伊達宗亮
五十嵐哲太郎　花田節　桐原利貞　須田辰次郎　山田精一　岩崎總十郎
大谷宗之助　服部尙義　町野重世　八木澤彰六郎　芳野貞碩　增山正治
市原又次郎　津田淸長　大谷宗之助　竹內八彌　成田直忠　多田綱宏
犬飼豐次　三輪國次郎　野村勝三　井上揆　山崎新太郎　松野因策
德川篤敬　白石長治　柳沼恒五郎　櫻井重壽　橋本七郎　川村一
小泉北村　石井六郎　山內滿五郎　上村才六　永戶直之助　原謙作
神林晋　長谷川三郎　川崎鐵彌　松村茂助　堀江九郎　井上跳蛙
三浦義司　吉田卯之助　十文字信介　關義幹　岡台輔　傍島元吉
加藤寬六郎　森玉仙　佐藤傳吉　手塚元瑞　國分兼郎　佐藤敬吉
大須賀筠軒　志賀照林　藤澤幾之助　橫山時雍　田代進四郎　山內通義
澤來太郎　富士日勸　正木莊之助　齋藤助作　淺井重光　百地宅憲
鈴木儀左衞門　岡部安孝　內藤耻叟　若山辰五郎　齋藤大三郎　亘理胤正
澤柳政太郎　大橋武治　岡五郎　田澤保次郎　依田百川　森中和
秋元米造　千石元三郎　柏村貞一　小野崎万平　松井淸水　松浦保治
押上森藏　黑田久孝　能勢思軒　佐藤郁二郎　片野續　佐々木龍治
下條幸次郎　長谷新一郎　山岡重壽　今村貞敎　小川弘水　渡邊文造
嶺八郎　上野庸山　龜岡爲貞　佐野保之助　增田贊　佐藤源三郎

松本周察　谷澤鎌太郎　鈴木清之輔　小倉長太郎　保科保
市島德次郎　林駒二　山田定雄　金田春如　岡山大迂
齋藤喜平治　長谷川恒太郎　中邑靜谷　佐藤三之助　栗田寛　淺田知定
二瓶廉吉　櫻田憲章　景山豐樹　新渡戸仙岳　鹿島則文　笠井信一
德江亥之助　村松山蕃　龜井有斐　井口一眠　竹內東仙　黑井直之進
佐藤新正　北村徹　植竹源太郎　鈴木靜太郎　佐藤精明　遠山景三
藤田天行　佐野常民　高頭多須久　楠本正隆　住田昇　高橋政資
志賀泉四郎　長谷川有造　武川敎義　七宮孚盛　日下博道　安田勳
庵崎亮慶　名須川他山　小池友謙　本間貞治　阿部浩　安井元亮
佐藤傳兵衛　新渡戸宗助　鷹野鋭太郎　佐藤甚吉　阪本隆哉　鈴木力衛
伊藤武蕃　加茂下良輔　田中玄貞　木村行藏　清水保民　佐藤八郎
勅使河原健之助　千石五郎　蒲生觀象　西村甚右衛門　橋本清左衛門　毛利清右衛門
西毅一　入間田寅次郎　味岡禮質　亘理九兵衛　安藤忠助　鄉內徹三郎
野村德　涌澤授　川村岩城　佐藤衡　森田九畹　宮野孝記
吉田敦和　狩野操　本間季明　渡邊敏　齋藤新兵衛　梅津清平
堀越修一郎　大須賀庸之助　渡邊　木村雄　角田林兵衛　矢吹良慶
小泉郡司　佐藤昌藏　樺山資　村松龜一郎　小笠原貞信　森井春太郎
藤田秀睦　平塚德夫　上野庸　馬込賢吉　田村玄泰　國分定治
服部誠一　土居致敬　熊谷信篤　千葉求　水尾訓和　中島民之助
鮫島重雄　氏家儀右衛門　橋本秀平　佐藤雄喜　時澤右一　高木榮之
今泉久三郎　吉田誠次郎　佐藤雄喜　高岡松郎　矢吹良慶　佐藤運宜
吉田誠次郎　佐藤雄喜　高岡松郎　千葉求　國分定治　佐藤金作
三品彥六　中島民之助

小泉貞五郎　南二郎　菊地圓　鈴木秤　小島震力　海野勳
鈴木純之進　柴田二三　小野寺境平　有馬憲文　細川貞之丞　吉本久隆
今野道敬　平山廣　齋藤源兵衛　青木磐雄　青田彥吉　倉田績
高辻修長　竹內正策　山本文次郎　折田彥市　北岡快信　川口龍太郎
石川杏庵　市村水香　鈴木紋三郎　谷田榮壽　遠藤是祥　野田四郎
男澤源太郎　中西庫造　大竹國司　池原熙　金子德輝　大畑肅
大町玄靜　中村雞太郎　富山廣信　川北麗亭　林源八郎　加藤至道
島津喜物太　武井才次郎　町田英太郎　久下豐忠　秋山久作　澤藤孝三郎
伊藤柳江　川島純幹　佐々居貞　茨木昭一　小久保長吉　山田正信
福田英　菊岡默雷　戶山忠剛　高松元楠　福島元一郎　花田銀太郎
野村茂　樹廣瀨三作　藤田安義　小野德太郎　樋渡亮一　世古祐次郎
鈴木馨　小幡忠藏　尾立維孝　杉原佐一郎　福鎌芳隆　野村政明
西村陸奧夫　濱野寅吉　大澤美太郎　和田磐終　長崎彊　信夫恕軒
渡邊儀藏　上田正當　岩崎精太郎　堀岡治三郎　關戶覺藏　神崎修三
引地忠治　內田清四郎　保岡亮吉　西山剛毅　坂本章　平田綱一郎
水野泰次　谷鐵臣　黑羽源治　和田盛慈　紺野常二　中根重次
押山長吉　村上幹當　林民五郎　高橋貞　中原鄧洲　安藤謙介
安藤政輝　藤谷永三郎　山崎金剛　增子永入　辻澤菖水　阿部長之助
諏訪忠元　江馬天江　久松勝慈　一條英一郎　大川宗炳　千田清太郎
荻生德三郎　鳴門義民　石橋貞幹　小川卓造　小林茂八　板橋雲山
鈴木馬巖　一倉貫一　服部立海　林芳太郎　永井環　高橋柳坡
賀古桃次　服部一三　市橋乙吉　川村理助　川村理助　遠藤元良

須川一誠	玉置慶二郎	川田百人	今津孝則	藤井正秋
椎川光遠	野口惟和	木村精造	龜井長太郎	折田平内
廣瀬湊	坂本彌一郎	萩本知念	伊集院兼雄	武川廉治
猛田安節	行方豊太郎	今泉杏庵	三島中洲	内池三十郎
小林鈾八郎	櫻井靜	宮島大八	成島復三郎	小野玄海
池田筆吉	米澤安立	山内巖	栗本瀬平	金守紫東
屋代善夫	增子永人	圓山信庸	田中平八	小田行藏
大東重善	鈴木米三郎	松野篤義	今井兼善	宇田晦藏
鈴木万三郎	小宵香村	野々山茂	三池親信	筒井寛聖
橋倉次雄	川崎江陽	彌城友次郎	鳥川重雄	箕輪金波
石田勝太郎	北村紫山	本田種竹	上原貢	坂西良一
千頭清臣	諏訪親良	上野春平	坂本親義	辻楽
栗本義喬	岡本武輝	加藤平四郎	古賀恒吉	生駒章
服部耕雨	多賀宗義	川村信成	猪股治平太	坂西良一
川上親義	生田清範	峰是三郎	鳥居斷三	川杉直方
鈴木劈太郎	菊池祐吾	山本峯造	丸山治平	北川眞愼
高岡蕉屋	遊佐正人	神田瑞穗	伊集院兼雄	黑田天外
關輔九郎	津田嘉一郎	堀口有一	尾崎行雄	柴崎鐵吉
向井福次郎	加納謙	安藤重雄	片倉景範	矢野龍谷
橋由太郎	矢內彌一郎	丹羽雙明	二宮直躬	楠正位
武川廉治	松田宗壽	後藤松吉郎	内池三十郎	小野玄海
金守紫東	小田行藏	筒井寛聖	宇田晦藏	箕輪金波
辻楽	生駒章	坂西良一	川杉直方	土方直行
石堂慧猛	河野霧海	板倉勝行	森山安太郎	大島多計比古
川田正澂	河野鈴次郎	曾根盛鎮	張秀則	吉田謹爾

以上大人諸君ニハ前年來遊歷其他ニ際シ厚遇ヲ辱フシ感謝ノ至ニ不耐因テ聊尊名ヲ錄シ奉酬ノ微志相表シ候也

宮內赤城再拜

明治三十二年四月十八日印刷
同　年四月廿一日發行

著作兼發行者　千葉縣平民　宮內猪三郎　東京市小石川區新諏訪町二十一番地寄留

印刷者　島保藏　東京市牛込區市谷加賀町一丁目二十番地

印刷所　秀英舍工場　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌書林　東京市日本橋區萱屋町六番地　東陽堂　電話四百八十七番

版權所有